「書きたくないねん！」と訴える中学生の学習支援

― 英語科の取り組み ―

大阪精神医療センター分教室

1　はじめに

本分教室の中学部には、不登校の期間が長く、学習に遅れのある生徒が多くいるほか、英語の読み書きに困難さがあり、英語の学習で特別な支援が必要な生徒もいる。どの生徒も退院後に地域校へ戻ることを踏まえ、基礎的な学習を補填し、学習への意欲を取り戻す必要があると考える。英語の授業は週 4 時間あり、教員は各生徒の地域校と連携し、入院中の学習予定範囲の情報を把握し、指導している。筆者が担当の中学部 2 年は 5、6 名程の生徒が在籍していたが、地域校は異なり、学習範囲もそれぞれ異なっている。地域校の定期試験を分教室で受験する生徒もおり、可能な範囲で地域校の学習範囲に合わせた学習指導をおこなう必要がある。また、不登校の期間が長く、英語は苦手、英単語のスペルが覚えられない生徒、書くことを嫌がる生徒など実態は様々であり、実態に合わせた学習支援が求められる。本稿では、英語を書きたくないと訴えた中学 2 年生の学習支援の実践について報告したい。

2　英語を書くことに抵抗感のある生徒の学習支援

(1) 入院当初の生徒の様子

入院時の教育相談では、英会語が好きで基礎的な学習ができるという情報を得ていた。しかし、初回授業で「やってみよう」と声をかけ、プリント教材を提示すると、生徒の反応は全くなく、授業中、ただ黙って座って過ごしているだけであった。着席できるが身体は横に向けたままであった。「プリントに書けそう？」と気にかけて尋ねると「書きたくない」という答えが返ってきて、鉛筆すら持つことはなかった。授業中の説明に「おもんないねん」と悪態をつくこともあった。生徒は英語が好きなはずなのに、なぜ学習しようとしないのか理解できず困惑した。それ以降 1～2 週間は学習に取り組まない様子が続いた。国語の学習でも全く書かずに過ごし、他教科の授業でも同様の状況で、他教科担当の教員も指導に困っている様子だった。

(2) 指導の工夫

①オリジナル単語カード

生徒にとって学習意欲が沸き、取り組みやすい学習のスタイルを模索することにした。他教科でも、生徒が学習しない、書かない様子が見られ、中学部の他教科の担当教員に尋ね、生徒がどのように学習しているか様子を伺い連携した。その中で、他教科の学習では、カードやタブレット端末のアプリを使い学習事項の暗記には積極的に取り組んでいることがわかった。英語の指導では①聞く、②読む、③話す（やりとり）、④話す（発表）、⑤書くの 5 領域での育成が求められるが、生徒にとって負担感の少ない領域から学習を取り組めように配慮した。主治医からの意見書には“分教室で学

図 1

図 2

習の遅れを取り戻し、自信をつけてほしい”と記載されていた。そこで、授業で生徒が書かなくても学習できる工夫を検討した。1 つ目は、教科書の学習単元の新出単語（動詞、形容詞、熟語）を覚えるために、生徒のための単語カードを作った（図 1）。表面には英語、裏面は日本語で意味を記載した。一般的な学習方法ではあるが、カードを手で捲る動作とともに、すぐに裏面に答え（日本語の意味）を確認でき、自分のペースで繰り返し学習できる点で、生徒は安心して学習できている様子だった。

②マッチングカード

2 つ目は、図 2 のような日本語・イラストと英単語が表記されたカードを作成し、2 種類のカードを対応（マッチング）させて、教科書に掲載の形容詞や動詞を学習した。これらのカードで学習し始める際、初めに教員がカードを捲り、生徒と共に発音を確認し、生徒にも発音のリピートを促した。生徒は英語を聞くこと、話すことは書くことよりも抵抗が少なかった。

単語カードもマッチングカードもどちらも本生徒にとって、自分のペースで落ち着いて一人で学習を進められるツールであるとわかった。その後の授業では、生徒自ら「カードやりますわ」と言い、自発的にカードでの学習を始め、定着していった。生徒は 1 回の授業で教科書 2 ページ分、10 語程度の進出単語と熟語を 10～15 分程度学習した。単語カードでの学習（インプット）の後、教科書の本文を読むことを勧めると、黙読して読むこと（アウトプット）ができた。本文内容の理解の確認は、教員からの問いかけに対して、生徒が短い言葉でも良いので口頭で答えるという形で本文内容の理解の確認をおこなった。

③タブレット端末の活用

生徒は地域校では、鉛筆で紙に書く代わりにタブレット端末アプリ Good Note を使い、キーボード入力で文字を書くことを取り組んでいた（図 3）ため、これを生徒に提案すると、英語の授業でもタブレット端末に文字を入力することには抵抗なくスムーズに取り組むことができた。英文法のプリントの解答を記入するために使用することができた。

(3)「やっぱり書こうかな」と言うようになった生徒

本生徒は入院中に分教室で地域校の定期試験を受けることになり、担任教員との面談で、生試験では用紙に鉛筆で解答を書く方法で受験することを選んだ。英語の授業でも、クロスワードや選択問題など書く作業の少ない問題を提示すると徐々に受け入れるようになり、書く課題にも取り組もうとすることが増えていった。授業の前半に「書きたくない」と言っても、途中で「やっぱり書こうかな」と言い出し、プリントに取り組むこともあった。書く作業ができるようになっても、書く課題が続くと疲れが見られたので、生徒の様子を観察し、学習中に休憩を取り入れることを認め、自分のペースで学習して良いことを伝えた。また、間違いを訂正すると苛立つ様子が多々見られた。心理的に安定した状態で学習を継続してほしいと考え、間違えずに済む学習方法として、いつでも自由に辞書を使い、単語等を調べて良いことを伝えた。辞書は『ジュニアアンカー中学　英和・和英』を使用した。日⇔英ともに調べることができ、全頁カラーでイラストや写真が多用され、視覚的に見やすい。言語だけでなく異文化への興味を惹きつける掲載内容となっている。本生徒は社会の学習にも興味があったので、生徒も興味深そうにページを眺めながら単語を調べていた。

図 3

このように、スモール・ステップで、生徒の様子、学習教材の選定、課題の分量の調整をその都度細かにしながら支援

の工夫を検討してきた。最終的に、退院前の１学期末頃に生徒は書くことを嫌がらなくなった。授業前に生徒から教員に「今日は何しますか？」と尋ね、「プリントください」と言って自主的に学習を始め、英語を書くことに積極的になった。期末試験の前には出題範囲を確認し、自主的に問題集を広げ、答えを書き込むこともできていた。「むずいな」と呟きながら、分からない箇所は辞書を引いたり、自分から教員に尋ねたりでき、自分で英語の学習を進めることが定着した。

３　考察

英語を書くことが苦手な生徒は多い。フォニックス（英語の綴りと発音の関係性を学ぶ音声学習法）の理解が充分でなく、単語の読み書きが覚えられないという生徒はよく見られる。本生徒もそのような生徒の一人で、書くことが苦手で、正しく単語の綴りを書けないことで苛立ち、間違いを指摘、訂正されると学習意欲を失い、学習を止めてしまったりする様子が時々見られた。

現在、英語の指導では①聞く、②読む、③話す（やりとり）、④話す（発表）、⑤書くの 5 領域の育成が求められるが、生徒は書く活動に対して抵抗感を示していた。そのため、書くことを無理に勧める指導は有効ではなく、得意な領域から学習に取り組ませる方向性を考えた。生徒が書くことに抵抗していたのは、恐らく字を書くことで間違って叱られたり、うまくいかなった等、ネガティブな経験として心に残っていたためで、心理的な要因が大きかったと思われる。また本生徒は書くこと自体を面倒に感じているということも充分あると思われる。入院当初の生徒の実態を把握し、抵抗していた書く活動は控え、得意な領域から学習に取り組ませる方向性を考えた。書くことに抵抗していた生徒に、まず学習しやすいスタイルを模索して、書く以外の領域の活動から進めたことが今回適切な支援になったのではないか。

筆者は授業の導入時、前述の単語カードを使った学習の他、英単語クイズ等ゲーム感覚で「話す」活動、チャンツや歌で「聞く」活動、YouTube や Instagram を閲覧し、海外の人の投稿を「読む」活動、などを取り入れた。また、既習事項を Small Talk に取り入れ、入門的な日常英会話表現を一言二言、話す活動にも取り組んだ。2 年生のクラスには他にも英語が苦手な生徒がおり、全員に向けて、生の英語に触れる、英語でタイムリーな話題に触れる時間を作ることで「英語がわかると楽しいかも」「英語の勉強してみてもいいかな」と生徒が少しでも思ってもらえるよう検討したことが、英語学習への動機づけとなり、本生徒にも英語を書く意欲が少しずつ出てきたのではないだろうかと考えている。また、毎回の授業で顔を合わせる中で、少しずつではあるがお互いの信頼関係ができてきたことにより、本生徒の書くことへの抵抗感が減っていったとも考えられる。

４　さいごに

応用行動分析で「CCQ(calm　穏やかに・close 近くで・quiet　静かに)」という考え方がある。筆者自身の個性も含まれるが、指導のスタンスとしても、「淡々と指導する」「説明は短くし、余計な事を話さない」スタイルで日々生徒たちと関わっている。英語は言語活動で５つの領域を取り入れながらの指導が必要だが、授業の構成は２部構成で、前半の時間で全体で一斉指導（歌、チャンツ、クイズ、リスニング等）、後半の時間では各生徒に合う教材を準備し、生徒は個別の学習課題に取り組み、机間指導をおこなっている。毎回このような形での指導や接し方が生徒にとっては居心地がよく、学習しやすいスタイルで合っていたのかもしれない。

本分教室の生徒は、不登校で学習空白が大きく、学習に嫌悪感を持っていることが多いが、入院中に分教室で自分に合った学習のスタイルを見つけ、1 人で学習できたという

自信を少しでも身につけ、退院後も自分で学習が進められるような支援の工夫を今後も模索していきたい。

＜参考文献＞

・『ザ　ジュニア　アンカー 中学　英和・和英辞典』羽鳥博愛・永田博人　2022 年 学研